書評

**Maria R. Antognazza, *Leibniz: An Intellectual Biography* (Cambridge University Press, 2009, xxvii+623p.)**

枝村祥平

本書は、ロンドン大学キングスカレッジ哲学部の教授である著者が、ライプニッツ（1646-1716）の哲学・自然科学の発展及び政治活動などの遍歴を示した伝記である。アントニャッツァは以前に『ライプニッツの三位一体・受肉論(Leibniz on Trinity and Incarnation)』（2007年、イタリア語版は1999年）を出版しており、ライプニッツの前期から後期までの形而上学・神学の研究者として知られていた。本書はそうした専門の枠をさらに打破し、ライプニッツという人物全体を描き出そうとした大著である。

なるほど本書以前にも、エリック・ジョン・エイトンが浩瀚な伝記（*Leibniz A Biography* 1985年、日本語訳1990年）を書いている。エイトンの著書は出版後四半世紀を経ても全く色あせておらず、日本語版を目にした当初もこれに匹敵する伝記は向こう数十年出ないのではと思わせるものであった。だが、本書はその予想を覆した。確かに数学や物理学や天文学に関する議論の変遷を追うという点では、著名な科学史家であるエイトンに譲りはするが、ライプニッツの幼少時代からの教育状況について資料を駆使して詳細に示した功績、及びライプニッツが少年時代から青年時代にかけてどの文献を読んでいたのかを示した功績などは大きいと言わざるをえない。またライプニッツの形而上学・神学の発展史的考察も、専門家としての見地から詳しくなされている。全体として、世界的にも注目すべき快挙であるといえるだろう。本書は二部構成で、第一部（第一、二章）は誕生から青年期まで（1676年以前）、第二部（三～九章）がそれ以降となっている。第二部の方が当然大部であるが、1676年以前が独立の部となっているのはライプニッツの少年時代の教育状況を明らかにすることが重視されているからだろう。以下では、本書の重要と思われる事項をまとめていく。

まず本書で示されているライプニッツの教育状況をみていこう。第一章（1646-67年）では、ライプニッツの誕生と洗礼、及び当時のヨーロッパ情勢が描かれる。父フリードリヒは、洗礼を受けているときにライプニッツが頭をもたげ目を見開いた姿をみて、また彼がテーブルから落ちても怪我一つせず微笑んだ姿をみて、優れた将来を予感したという(p. 27)。父の死後に敬虔なルター派の人々に囲まれて育ったライプニッツは、1653年にザクセンの名門の一つであるニコライ校に進学した(p. 30)。そこでは主に、文法・修辞・論理学及びルター派神学が教えられており、ラテン語とともにギリシャ語を学ぶ機会もあったが、自然哲学や歴史はほとんど教えられていなかった。修学と並行してライプニッツは独学を重ね

た。例えばライプニッツが幼少時代リウィウスを読んだことはよく知られているが、リウィウスの本を手に取る前に自宅に下宿をしていた学生がおいていったカルヴィシウスの『年代記（Opus Chronologicum）』を読んだことも指摘されている(p. 33)。ライプチヒ大学に進学してからは、論理学では特にペトルス・ラムスとヨハン・ビスターフェルトの影響があったとされる(pp. 39-45)。ラムスは様々な事柄を統一的に説明しようとする普遍的記号法の試みに、ビスターフェルトはあらゆるものが互いに調和し表現しあう関係にあるという思想に影響を与えたとされる。周囲の学生は保守的だったが(p. 50)、ライプニッツ自身は早い時期にゲオルグ・カリクシストによるルター派と改革派カトリックとの和解の試みから影響を受けたという(pp. 47-50)。イエナ大学でライプニッツが、教授と学生が共に参加する古典や新刊本を読んで議論するグループに参加したことも述べられている(p. 59)。

また、ライプニッツの教育環境に関連して本書では、彼がどの時期に著名な哲学者や科学者の著作に触れたかが考察されている。ライプチヒは本がドイツでもとりわけ豊富で(p. 34)、ライプニッツは学校のカリキュラムに組まれていない本も自発的に勉強していたが、ガリレイやデカルトの原著には70年代半ばまで触れることは出来なかったという(p. 52)。対してパリ時代（1672-6年）を記した第三章では、やっとガリレイを原著で読んだこと(p. 146)、1675-6年にデカルトの『哲学原理』を精読したこと(p. 167)、マインツで読んだスピノザの『神学・政治論』を再読し(p. 168)、当時出版されていなかった『エチカ』を読もうとしたいきさつが述べられている(pp. 168-9)。

以上の情報は伝記ならではのものだが、本書では加えて哲学的著作に関しても一歩踏み込んだ解釈がなされている。エイトンの伝記で解説されなかった哲学的著作としては、アカデミー版に纏めて編集され1992年にG.H.R.パーキンソンにより英訳された形而上学的小論集『諸事物の総体について（De Summa Rerum）』（1675-6年）が挙げられるが(pp. 171-4)、本書ではこの小論集でライプニッツが、因果に関する考察を通して、神をすべての絶対的属性を備えたものとして捉えたことが述べられる。本書によればSumma Rerumという語は、文字通り諸事物の総体ないし宇宙を意味するとともに、諸事物のなかで最も高きものないし神をも意味する。ライプニッツがこのような言葉の用い方をした理由は、諸事物が実体としてではなく様態として異なっているという驚くべき主張と(A VI iii, 573)、それに基づく一種の汎神論的世界観（これは後にライプニッツ自身により退けられるが）にあると考えられる。

またアントニャッツァは、異なった哲学的なテキストにおける一見相反するような主張を整合的に説明しようとしており、傾聴に値する解釈が見受けられる。まず彼女

は、1690年代から1700年代初頭までの、物体の形而上学に関する実在論的な記述と観念論的な記述とに独自の説明を与えている。ヨハン・ベルヌイ宛書簡では完全なモナドとは魂ではなく動物のような有機体であるとされ、延長した身体をもったものが実体であるという実在論的な主張がされていたが(GM3 537; 1698年)、デ・フォルダー宛書簡(G2 252; 1703年)ではモナドとは能動的力と受動的力を備えた非物質的実体だとされており、主張が食い違うようにも思われる(pp. 422-3)。彼女によると、数学者のベルヌイは哲学の素養がなく、ライプニッツは彼に対しては非物質的で精神に類比的なもののみが実体だという直観に反する哲学的枠組は提示しづらかった、ということになる。またアントニャッツァは、出版を経た『弁神論』（1710年）と出版されていない他の哲学的テキストでは、偶然的真理の説明の仕方が異なっていることにも着目する(p. 483)。そして本書では、必然的な真理は有限の手続きで証明可能だが偶然的な真理の証明は有限の分析では決して遂行されないということについての議論が『弁神論』では不十分だが、それはこの議論が数学をも前提としたテクニカルなものであり、従ってライプニッツはそれが幅広い読者を想定した『弁神論』になじまないと考えたからだ、とされる。

さらに本書では、カトリックとプロテスタントの合同（新旧合同）に関連して、ライプニッツの神学的かつ政治的な活動が多く紹介されている。第二章（1667-72年）では、カトリックの大司教が治めるマインツで就職して後、ルター派からカトリックに改宗したボイネブルグとともに新旧合同に向けた活動を始めるいきさつがある(pp. 85-90)。またライプニッツがハノーファーに就職してからの経緯を記した第四章（1676-87年）では、カトリックであったヨハン＝フリードリヒ公宛書簡（1679年）「で、実体的形相の復興が新旧合同に貢献しうるとされていたことが紹介される(pp. 234-5)。カトリックが重視する化体（ミサでパンがキリストの肉体に実体変化するという秘蹟）は、実体的形相を復興し物体の実在性を認めることで説明ができるはずだ、というのである。その後に書かれた『キリスト教試論（Examen Religionis Christianae）』（1686年）もライプニッツの周辺の有力者にローマカトリックが多かったためかかなりカトリックよりの提案であることが指摘されている(pp. 256-9)。第五章（1687-90年）では、ヤンセン派のアントニオ・アルベルティからの、ある枢機卿がライプニッツがカトリックに加わればバチカンで重要なポストに就く他大変な利点があるとの申し出をしていたとの報告がある(p. 306)。第六章（1690-8年）では、教会合同に関連して、何が異端であるのかを明確化する必要性を感じたライプニッツが、ソッツィーニや英国国教会における反三位一体を批判した様が描かれる(p. 344)。一方で、中国における仏教徒・キリスト教徒・イスラム教徒共存

が、―とりわけルイ14世の宗教的非寛容との比較で―肯定的な目で見られていることが指摘される(pp. 360-1)。また、聖書との関連で諸言語の起源が求められていたことが紹介されている(p. 364)。最終章（1714-6年）では、イエズス会士トゥルヌミーヌがライプニッツがパリに移るならば手助けをする旨を伝えていたこと、ルイ14世もライプニッツを招くにやぶさかではなかったことが述べられる(p. 527)。

以上、本書に記された重要事項をみてきたが、一方でこれだけ大部の伝記であるので、本書のいくつかの議論は批判的吟味の余地があるように思われる。ここではライプニッツの神学及び物体の形而上学に的を絞り、本書の解釈に考察を加えて書評を閉じたい。ライプニッツの神学及び形而上学を整合的な体系として示すことは大変困難な作業であり、今なお著名な学者の間で多くの説の対立がみられる。従って、ある解釈上の立場から本書の神学・形而上学的考察を一方的に批判することはフェアではないが、学説の分かれる分野についての研究書や論文の例に漏れず、本書の解釈もさらなる議論を呼ぶものといえるだろう。

第一に、グレゴリー・ブラウンが既に述べているが(Brown, 2009)、アントニャッツァは初期の物体の形而上学を解釈するにあたり後期の議論を読み込んでいるきらいがある。例えば、アントニャッツァは『抽象的運動論（Theoria Motus Abstracti）』（1671年）の「物体は瞬間的精神である」との主張を受けて、物体が不可滅の精神的原理に存すると結論づけている(pp. 111-3)。そして、この時期に既に不可滅の非物質的実体であるモナドを基軸とした存在論の萌芽が見られるという。しかし、よく見ると『抽象的運動論』での物体は瞬間にのみ存在する傾向力（conatus）に存するものでしかなく、この解釈は説得的でない(枝村, 2012)。

第二に、アントニャッツァはライプニッツを敬虔なキリスト教徒と位置づけるが、この結論には一考の余地があるように思われる。ライプニッツのキリスト教に対する姿勢と真意は、彼とスピノザの関係、カトリックとプロテスタントとの合同の計画、異教徒が多く住む中国への関心などと相俟って思想史上の大問題の一つといえるだろう。この難問に取り組んだことは評価できるし、ライプニッツが1669年に腹違いの兄にあてた手紙の「福音的真理を生きる限り保持する」という一節なども紹介されてはいるものの(p. 29)、本書からは未だライプニッツの個人的信条の立証が十分には読み取れない。

確かにライプニッツが神に対する信仰を持っていた、ということであれば頷ける。ライプニッツは、我々の存在の原因であり、また永遠真理をその知性によって基礎付けるところの神を信じていたと思われる。そしてこの神はスピノザの神と異なり、我々を様態としてもつのではなく実体として創造した神ということになるだろう。

しかし、三位一体と受肉についてはどう

か。アントニャッツァがいうように、ライプニッツが受肉の神秘に形而上学的説明を与えようとしていたことは事実である。だが、受肉の説明が新旧合同に必須であるという認識のもとに考察がなされていたとしたらどうだろうか。この場合、受肉の形而上学的説明がライプニッツ自身の信条の反映とは限らないことになるだろう。

さらに問題なのは、ライプニッツの奇跡への批判的な態度である。ライプニッツによれば、神は最も単純な秩序により多様性を実現しようとするのであり、秩序に例外を設けない。確かに『形而上学叙説』（1686年）では、法則（règle）と秩序（ordre）が区別され、秩序が自然法則を逸脱した奇跡をも包括したものだと示唆されるが(G4 431)、これがアルノーなど新旧合同にあたっての政治的な有力者を読者として想定していたものであることもまた事実である。そしてヴォルフ宛書簡（1715年）では、一般的法則ないし一般的観察（observatio）を乱すものは不完全性であると述べられる(LW 163; Brown, 1995)。すると受肉・処女受胎は、神による世界への超自然的な介入で、ここでは宇宙の自然法則による斉一的な秩序づけはいわば損なわれることにならないか。ライプニッツが受肉を固く信じていたなら、それがいかなる意味で「単純な」秩序に組み込まれるのか、説明が必要となるだろう。

第三に本書では、デ・ボス宛書簡でライプニッツが実体的紐帯（vinculum substantiale）を論じた主たる動機が受肉を認めることにあったと示唆されているが、それも必ずしも明らかではない。ライプニッツはデ・ボス宛書簡（1712年）で、動物のような有機体において、実体的紐帯が多くのモナドに実体的一性を与え、有機体全体を複合実体（substantia composita）たらしめる可能性を示唆している(G2 435)。そしてアントニャッツァは、デ・ボス宛書簡でライプニッツが実体的紐帯がなければ受肉の神秘が説明されないのではないかと述べていることを重視する(p. 479; G2 461)。

だが、もし受肉が不可疑の真理で、実体的紐帯がそれに必須のものであれば、なぜライプニッツは実体的紐帯の存在を即座に受け入れなかったのか。実際ライプニッツは最後まで、実体的紐帯がある場合とない場合とを分けながら議論を続けており、デ・ボス宛書簡においても実体的紐帯の存在は明確に肯定されているわけではない。

ダニエル・ガーバーによれば、ライプニッツはデ・ボスが実体的紐帯にあまり関心を示さなくなっても、これを論じようとしていた(Garber, 2009, pp. 380-1)。そうすると、ライプニッツによる実体的紐帯の考察は、単にカトリックであり実体的紐帯による化体の説明に関心をもったデ・ボスへの外交的妥協というよりも、ライプニッツ自身の自発的関心によるものと考えるのが適切だと思われる。とはいえガーバーが示唆するように、ライプニッツは抵抗などの受動的な力が延長した物体全体にいきわたってい

るという事実に鑑み、延長した物体が実体である可能性、そして実体的紐帯によって延長した物体に実体性が与えられる可能性に関心をもったのかもしれない。この場合、ライプニッツが実体的紐帯についての考察を続けた主たる動機はむしろ物理学に関連したものだということになる。

また1714年の代表的な二著作『モナドロジー』及び『理性に基づく自然と恩寵の諸原理』（以下『諸原理』）では、実体的紐帯に基づいた複合実体の存在は必ずしも認められていない。これは、ライプニッツが必ずしも、受肉は真理でありかつ実体的紐帯の存在が受肉に必須だと確信しているわけではなかったことを示唆するのではないか。アントニャッツァは正当にも、『諸原理』では確かに複合実体（une substance composée）という言葉が使用される一方、『モナドロジー』では複合的なもの（le composé）という表現はあるが複合実体は論じられていないことを指摘する(pp. 501-2; G6 599, 607)。とすれば、『諸原理』でのみ複合実体が論じられた理由は、それが一般読者に向けたもので、延長した身体をもった有機体が実体だという常識的な見解に沿った用語法をライプニッツが使いたかったからかもしれないのである。またライプニッツは『諸原理』で複合的なものは単純実体ないしモナドの集合体（l'assemblage）だとしており(G6 598)、この枠組みに基づけば複合実体は集合体だということになる。この用語法は、実体と集合体を対比して論じてきたライプニッツのものとしては破格で、『諸原理』で有機体が厳密な意味で実体と認められていたかは疑わしい。

以上の批判は、本書という大きな氷山の一角のそのまた隅を突付いたに過ぎない。従って、この本のライプニッツ研究における多大な貢献を損なうものではない。

**略号**

A = *Sämtliche Schriften und Briefe.* Herausgegeben von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Darmstadt, 1923 ff., Leipzig, 1938 ff., Berlin, 1950 ff. Cited by series, volume, and page.

G = *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz.* Ed. C. I. Gerhardt. Berlin: Weidmann, 1875-1890. Reprint, Hildesheim: Georg Olms, 1978. Cited by volume and page.

GM = *Leibnizens Mathematische Schriften.* Ed. C. I. Gerhardt. Berlin: A. Asher, and Halle: H.W.Schmidt, 1849-1863. Cited by volume and page.

LW = *Briefwechsel zwischen Leibniz und Christian Wolf.* (1860). Ed. By C.I.Gerhardt. Halle.

**文献**


Adams, A. (1994). *Leibniz: Determinist, Theist, Idealist.* New York: Oxford University Press.

Brown, G. (1995). "Miracles in the Best of All Possible Worlds: Leibniz's Dilemma and Leibniz's Razor." *History of Philosophy Quarterly, 12-1*, 19-39.

——— (2009). "A Review: Leibniz A Biography." *Notre Dame Philosophical Reviews* (A Electrical Journal) http://ndpr.nd.edu/news/23932/?id=15446

枝村祥平 (2012).「初期ライプニッツの物体の形而上学 —1671 年に焦点をあてて—」, 関西哲学会『アルケー』第 20 号, 83-94 頁.

Garber, D. (2009). *Leibniz: Body, Substance, Monad.* New York: Oxford University Press.